様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月　 ２ 日現在

機関番号：３１６０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２２４８

研究課題名（和文）障害の「美学」における創造的な場の生成と文化的背景に関する研究

研究課題名（英文）Generation of the Creativity and the Cultural Contexts in Disability Aesthetics

研究代表者
田中　みわ子（Tanaka, Miwako）

東日本国際大学・健康福祉学部・准教授

研究者番号：１０５８１０９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ベルギーの知的障害者の団体クレアムの提唱した「アール・ディフェランシエ」を事例とすることによって、障害者の芸術表現における美学が、表現の創造現場における人々の相互関係性の中から創出されていること、そしてそのような創造的な場が形成される文化的背景には、障害者アートの潮流との関連性があることを考察したものである。主に欧米を中心とする障害者アートの潮流において、障害の美学は、障害の経験から生まれる美の表現（形態の美学）に見出されてきたが、クレアムにおいては、創造性それ自体を即興表現によって体現するところに美学が見出される（即興の美学）ことも明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の成果により、障害学において英米を中心として論じられてきた障害者アートの潮流と、美術史など芸術分野において論じられてきた「アール・ブリュット」「アウトサイダー・アート」の潮流を相対化し、関連づけていくことが可能となる。障害者アートが盛んに実践されるようになった現在、ベルギーのクレアムにおける芸術実践を考察の中心に据えてた本研究は、障害者の芸術表現を芸術文化研究に位置づけ、再評価を促すものである。

研究成果の概要（英文）：This research aims to explore the “aesthetics” of artistic expressions by disabled people. By analyzing the “different art” advocated by the CREAHM in Belgium, which is an organization for artists with intellectual or mental disabilities, it regards aesthetics as created from the interrelationships of the art workshops, and the cultural background of such creative fields as interwoven in the trends of the arts and disabilities. The research also shows two perspectives of disability aesthetics in the disability arts. In Western countries, disability aesthetics are based mainly on experiences of disability (the aesthetics of form); however, at the CREAHM, they are found in improvisational expressions in which creativity itself is embodied (the aesthetics of improvisation).

研究分野：障害学

キーワード：障害　障害の美学　身体　アート　即興

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)　障害を社会、文化の視点から捉える障害学において「障害者アート」が学術的にも実践的にも重要視されてきている。これまで否定的に意味づけられてきた障害者の表現を積極的なものとして捉えていくという「当事者の美意識」に基づく美学は、障害の表象イメージや文化的価値観の形成においてきわめて重要な役割を果たしていると考えられる。このような障害学の視点に基づく当事者の美意識と文化的表象を主題とする研究は、主に英米を中心になされており、その成果が文学および芸術学など人文学の領域において蓄積されてきている。日本においても障害者アートや文化的表象に関する研究や実践の重要性が増していくことも予測され、障害学の視点に基づいた障害者アート研究をさらに充実させていく必要があると考えられた。

(2)　障害学では、障害のある当事者自身が主体的に生み出してきた芸術表現における「美学」を、既存の文化的価値観に対する「異議申し立て」や「新たな価値観の創出」と捉える学術的傾向がある。その一方で、障害者の芸術表現への注目には、「アール・ブリュット／アウトサイダー・アート」をはじめとして、「アート・セラピー」「コミュニティ・アート」などいくつかの潮流があり、芸術、医療、福祉などの分野から研究され、実践されてきた背景もある。日本国内では、障害者の芸術表現が、障害者の自己表現を促し、潜在能力を高める（エンパワメント）ことから、文化政策的観点からの関心も高まっている。また、美術市場からの芸術的評価／社会的地位を得ることによる就労の機会や経済的自立を確立していくことに向けた社会的な動向も生まれているなど、障害者アートの潮流は多様化している状況がある。

(3)　これまで若手研究（B）「障害者の芸術表現における「美学」の成立過程に関する研究―障害学の視点から」（平成 24～25 年度）および若手研究（B）「障害者の芸術表現における美学と身体観の系譜に関する研究」（平成 26～27 年度）において、主にアメリカの障害者アートの実践を中心に研究を行い、障害者の芸術表現において形成される美学が、従来の障害の文化的表象や身体イメージを変容させるものとして立ち現れ、そのような美学を創出・形成する場として、1970 年代以降の障害学および障害者アートの実践が重要な役割を果たしていることを検証してきた。それらの研究から、障害の「美学」がどのような創造的な場を生成しているのか、そしてそれはどのような文化的背景および要因に基づいているものなのかをさらに具体的に探究することが、本研究の課題として導き出された。

２．研究の目的

本研究は、障害者の芸術表現における「美学」が生起する創造的な場において実証的かつ理論的に調査分析を行うものである。それにより、障害者の芸術表現における「美学」が、表現の創造現場における人々の相互関係性の中から創出・形成されていることを示し、そのような創造的な場が形成される文化的背景および要因を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

(1)　障害者の芸術実践のなかでも、1979 年からベルギーの知的障害者による芸術団体クレアム（Créahm）を中心に展開された「アール・ディフェランシエ（art différencié）」の実践に焦点を当て、その国際的展開を追跡する。「アール・ディフェランシエ」がどのようにヨーロッパを越境して世界各国へと広まったのか、それがどのように芸術の表現形式に影響を与えると同時に、差異をもたらしたのかを、具体的な芸術表現の創造現場から明らかにする。

(2)　本研究は主にクレアムにおける実地調査に基づくものである。クレアムの芸術実践の参与観察から、創造的な場の実態を析出し、その仕組みを分析した。また、障害のあるアーティストを取り巻く社会的、文化的、政治的状況についても聞き取り調査を行った。

(3)　クレアムを中心とする「アール・ディフェランシエ」にみられる創造的な場のありようを、文化的背景と関連づけて分析を行った。その際、クレアムの芸術実践に大きな影響を与えたと考えられる「アール・ブリュット」についても現地に赴いて調査を行い、クレアムとの関連を探った。美術史の文脈と障害学の文脈を交差させつつ、アール・ディフェランシエの位置づけを明確にすることを分析の観点とした。

(4)　上記の実地調査を、英米における障害学および障害者アートの実践と対比しながら文化横断的な分析を行った。なお、英米の障害者アートの動向については文献研究が中心となった。研究内容の妥当性については、当該分野の研究者や障害者アートの実践団体などと意見交換を行うものとした。

４．研究成果

(1)　障害者アートに関する先行研究を検討した結果、現在に至る障害者アートの潮流は、主に以下の 4 つに分類される。①アール・ブリュットおよびアウトサイダー・アートをはじめとする芸術分野における実践。②アート・セラピーや余暇活動を中心とする福祉・医療分野における実践。③障害の有無にかかわらず誰もが参加できる企画としてなされるコミュニティ・アートなど

の実践。④障害のある当事者自身が自らの経験を反映させて制作するディスアビリティ・アートと呼ばれる実践。これらはいずれも重なりあいながら、現在の障害者アートの興隆を支える文脈となっているといえる。

(2)　ベルギーのクレアムにおいて提唱された「アール・ディフェランシエ」が誕生した背景には、主に美術界におけるアール・ブリュットおよびアウトサイダー・アートへの関心の高まりと呼応していたという文化的背景がある。ただし美術界においては、あくまでも作品の評価と作者の置かれた社会的状況が、従来の美術教育の影響を受けていないことが重要視されていたことに対し、「アール・ディフェランシエ」は、当時の「アール・ブリュット」などの芸術潮流に賛同しつつも、それとは異なるものとしての芸術を提唱するに至っていることが調査から明らかになった。

(3)　クレアムにおける実地調査から、クレアムの実践おいては、作品の芸術的価値の追求がなされており、また知的障害のあるアーティストたちの創造性を芸術的価値として位置づけるための試みがなされていることが理解された。また、クレアムの芸術実践は、絵画・造形のみならず、音楽、演劇、ダンス、サーカスへと発展してきたが、それぞれのアトリエ（ワークショップ）が創造的な「場」となるような仕掛けがあることも、実地調査から把握することが可能となった。なお、創造的な「場」の生成には、知的障害のあるアーティストの芸術表現を引き出しているアニマトゥールと呼ばれる指導者の存在が不可欠であることは、以前の研究調査からも明らかであったが、そこにどのような「美学」が見出されるのか、という点については今回の調査を踏まえて考察を行った。

(4)　創造的な場の生成については、複数のアトリエがあることにより、アーティストたちがそれぞれの表現形式を探究する機会が複数あること、アーティストとしてのアニマトゥールが、彼らの表現を最終的に作品として観客に届ける役割を担っていること、そして、彼らの芸術実践を支える他の支援者たちが、彼らの日常生活の支援を行っていることが、相互に相乗効果をなしていると考えられた。アーティストたちも互いに日々のコミュニケーションをとっており、「アール・ブリュット」および「アウトサイダー・アート」が当初想定していた社会的な孤独はみられない。また、スタッフたちの多くは、アーティストたちの「即興性」に芸術性を認めており、「即興性」の観点から、アーティストたちの適性をみていると捉えられた。

(5)　また、近年の傾向として、知的障害のあるアーティストのみならず、精神障害のあるアーティストが新たに参加するようになったということがある。これは、ベルギーの障害福祉制度に基づいた動きであるが、そのことにより新たな表現形式を模索する機運も生まれている。聞き取り調査や参与観察からは、アニマトゥールたちにとっても、精神障害のあるアーティストへのアプローチについては、これまでとは異なると考えていることが伺えた。そうしたクレアムの日々の芸術実践のあり方を分析することによって、以下の見解を得ることができた。従来の障害の「美学」は、障害の経験から生み出された表現形式の追求であり、経験に基づく美学の提示であると考えられる（形態の美学）。それに対して、クレアムの提示する障害の美学は、あくまでもアニマトゥールの関係性のなかから「美学」を立ち上げており、主に即興表現を通じて創造性それ自体を提示しようとしているところに「美学」が位置づけられるといえる（即興の美学）。障害の「美学」をめぐる比較考察の視点が得られたことは、本研究の大きな成果である。

(6)　障害学および障害者アートに関する研究は、日本および欧米社会を中心としてなされてきたといえるが、インドネシアのバリ島における障害のある人々による芸術実践と対比することによって、新たな知見も得られた。バリ島における演劇などの芸能においては、障害の「美学」を体現する者は、必ずしも障害のある者に限定されない。障害者の芸術表現は、主に欧米を中心として美術史や障害学の潮流のなかに位置づけることができたわけだが、他の文化的、社会的、学術的背景をもつ地域と比較してみるならば、表現する者とそれを感受する者との関係性のあり方によって、障害の美学の生成過程が異なることが指摘できる。

(7)　これらの成果は、国内においては、障害学の視点に基づく障害者アート研究として位置づけることが可能である。現在、国内においては、障害者アートの取組みが数多くなされており、医療、福祉、芸術分野のみならず、大規模災害後の地域復興の一環としてなされるなど、領域横断的な実践が蓄積されている。こうした社会的状況において、本研究は、障害者アートの国内外の潮流を相対化しながら、関連づけていく試みとしてインパクトをもつといえよう。さらに国外においては、障害学におけるパフォーマンス研究および、表象文化研究が相次いで発表されていることから、障害者アートに関する人文学的研究が一つの学術分野として確立しつつあり、注目が高まっていることも伺える。本研究は、こうした障害学における人文学研究、芸術研究の一つとして貢献しうるものである。

(8)　国外の障害学および障害者アート研究への関心の高まりを裏づける動向として、International Conference on Disability Studies, Arts, and Education という国際会議がフ

ィンランドとアメリカの研究者を中心に設立されたことは、当初予期しなかったことであった。2019 年 10 月に開催された第 2 回会議に参加したことにより、障害学と芸術学（および芸術教育）が重なる研究領域の最新の動向について把握できたことは大きな収穫であった。とりわけ、ディスアビリティ・アートを主とする障害学におけるパフォーマンス研究と表象文化研究は、障害を取り巻く価値観そのものを問い直す試みとして捉えられ、芸術学および芸術教育が提示してきた価値観に対しても働きかけるものであることの示唆が得られた。

(9)　今後の展望として、本研究の成果を速やかにまとめて研究論文として発表するとともに、本研究およびこれまで取り組んできた障害の美学に関る調査研究をさらに発展させていくことを目指す。これまでは主に、障害の美学が生起する場および身体表現とその文化的背景に着目して研究を行ってきたが、障害の美学がどのような身体観の変容をもたらしているのか、そしてそれがどのような社会的効果をもつものなのかは、解明すべき問いとして残されている。したがって、障害の「美学」が提示する身体観の変容を明らかにしつつ、その文化的差異および社会的効果を解明することを試みていく。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 田中みわ子	４．巻 54
２．論文標題 芸術創造の新しいかたちを考える―障害者アートの実践をめぐって	５．発行年 2017年
３．雑誌名 駿河台大学論叢	６．最初と最後の頁 175-192
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://ci.nii.ac.jp/lognavi?name=crossref&id=info:doi/10.15004/00001717	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 田中みわ子
２．発表標題 身体表現にみる眼差しのダイナミクス
３．学会等名 科学研究費補助金事業「新学術領域研究」「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築」第2回シンポジウム
４．発表年 2017年

１．発表者名 田中みわ子
２．発表標題 創造性はどこに生まれるのか？―ベルギーの知的障害者による芸術団体クレアムの実践から
３．学会等名 駿河台大学教養文化研究所公開シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2016年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

アウトリーチ活動 ①田中みわ子「アートとコミュニケーション」、第31回いわき市私立幼稚園協会PTA連合会大会講演会（第二部）（於いわき市文化センター）2017年11月24日. ②雄谷良成、長谷川政宣、田中みわ子「鼎談　雄谷良成氏を囲んで」社会福祉法人育成会講演会「いま、ごちゃまぜがおもしろい！―地域共生社会の可能性」、社会福祉法人育成会主催（於ホテルハワイアンズ）2018年12月8日. ③田中みわ子「地域とアートをつなぐ風景」令和元年度いわきヒューマンカレッジ（市民大学）地域生活学部　第2回講座（於東日本国際大学）2019年9月21日. 新聞記事 ①田中みわ子「知的障害をもつ人々と芸術力―共犯的な関係から生まれる表現の場へ　社会的文化的環境も変化」『いわき民報』（夕刊）第21426号、7頁、2016年10月6日. ②田中みわ子「地域というフィールドで学ぶ―さまざまな出会いに導かれて」『いわき民報』（夕刊）新聞広告「いわきとともに」（第11回）、2018年3月22日.

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考